

組織学会通信

No.98

2025. 12. 20

【大 会 関 係】

【1】2026年度組織学会年次大会報告

2026年度組織学会年次大会は、大会実行委員長・中野勉先生のもと、青山学院大学にて開催されました。東京都渋谷区、青山キャンパスという好立地での開催となった今回、334名（招待者含む）もの参加者を迎えるに終了することができました。中野先生、山下先生をはじめ、青山学院大学の実行委員会の先生方には、企画策定から当日の会場運営に至るまでご尽力いただきました。心より御礼申し上げます。

また、大会にてご登壇された先生方、ご来場くださった学会員の皆様にも重ねて御礼申し上げます。皆様のご協力により、今回も大きなトラブルもなく、無事に大会を終了することができました。

本大会の統一テーマは「VUCAの時代と組織の可能性－時間、空間とモード」でございました。これは開催校から、さまざまなセッションの学術的なトピック及び研究分野の境界を限定的に求めるのではなく、大会全体の課題意識として、ご参加いただく皆様にお考えいただきたい、とのご提案によるもので、広義の組織・戦略研究全般の発表とディスカッションの場として企画を策定いたしました。デジタル化や国際化が進むVUCA

(volatility, uncertainty, complexity, ambiguity) の時代において、組織論分野の諸理論や概念がどのように応用出来るのか、多面的に考察・検討することを目指しました。

本大会ではこのテーマのもと、2日間にわたり、(1)開催校主催セッション、(2)大会委員会企画セッション、(3)基調講演、(4)経営者講演、(5)ランチョン・セッション、(6)特別セッションなど、バラエティー豊かなセッションが開催されました。

(1)開催校主催セッションでは、1日目に「実践共同体研究の最前線：ミクロとマクロの視点」として松尾睦先生（青山学院大学）、松本雄一先生（関西学院大学）、相原基大先生（北海道大学）が登壇され、また同時間には英語セッションとして、“Creating Value in the Age of VUCA: Gaps between the Present and the Foreseeable Future in Time, Space, and Mode”が開催され、中野勉先生（青山学院大学）をモデレーターとして海外からお招きした先生方や水上祐治先生（日本大学）が登壇されました。いずれもフ

ロアを巻き込み活発な議論が行われました。2日目には、「繊維産地・現在の明暗と今後のDX化での展開の可能性」(セッションリーダー：宮副謙司先生)、「DXと組織変革－ポイントソリューションからビジネスシステムの変革へー」(セッションリーダー：澤田直宏先生)、「ジョブ型人事が変える『組織と個人の関係』『日本経済』『日本社会』」(セッションリーダー：須田敏子先生)、「Advancing Innovation Management Systems: Unlocking the Potential of Roadmapping through Circular Economy, Globalisation and AI-Driven Digital Transformation」(セッションリーダー：廣瀬雄大先生)と、いずれも青山学院大学の先生方がセッションリーダーをお務めくださり、企業の実務家等をお招きして、理論と実践の架橋となるような議論が多く交わされました。

一方、(2) 大会委員会企画セッションでは、1日目には「『よいこと』を『上手に成し遂げる』方法」を考える学問としての経営学再考」として、吉村典久先生(関西学院大学)、鈴木竜太先生(神戸大学)、田中一弘先生(一橋大学)、宮本又郎先生(大阪大学名誉教授)、山田幸三先生(大妻女子大学)により、故加護野忠男先生(組織学会元会長)の数々の業績について考察が行われました。そして2日目には、「若手研究者による研究テーマの再構築とフィールド開拓の実践」(セッションリーダー：佐藤秀典先生(筑波大学))、「【組織科学】60周年企画セッション「善き社会のための経営学」」(セッションリーダー：森永雄太先生(早稲田大学))、「国際比較・共同研究の進め方、その面白さと勘どころ」(セッションリーダー：藤澤理恵先生(青山学院大学)開催校と共同企画)と、経営学研究の仕方、そして経営学のこれまでとこれからを考えさせるような、多くの学会員にとって関心の高いテーマが取り上げられ、議論が交わされました。

そして(3) 基調講演では、Heather A. Haveman先生(Sociology and Business at the University of California, Berkeley)による、組織論の未来についてのご講演、さらに(4) 経営者講演では、高橋敏之氏(東急株式会社 取締役専務執行役員)による、東急による渋谷や東急沿線のまちづくりと将来像についてのご講演がありました。いずれも多くの学会員の参加があり、質問も盛んに行われました。

2日目の昼には、(5) ランチョン・セッションにて、「大学院生・若手研究者のアカデミックポストへ就職に向けて」(セッションリーダー：藤井暢人先生(桃山学院大学))と若手の学会員にとって大変関心の高いテーマで議論が行われ、その後の(6) 特別セッションでは、「スタートアップ経営者が志向するVUCA時代の組織マネジメント」として、山下勝先生(青山学院大学)司会のもと起業家の方々のパネル・ディスカッションが行われました。

本大会での新たな取り組みは、1日目の会員総会後に開催された交流会でした。開催校にてソフトドリンクとフィンガーフードをご準備いただきました。1時間の開催でしたが、周辺に飲食店が立ち並ぶ青山という立地でしたので、その後学会員の皆様は各自懇親

の場を設けられたことだと思います。今回のような交流会のスタイルは、今後の大会運営の良い先例となるものと考えております。

以上、充実したセッションの実現にご協力くださいました全ての皆様に対して、改めて心より御礼申し上げます。

2026 年度 ドクトラル・コンソーシアム開催報告

大会に先立ち、9月19日（金）には、ドクトラル・コンソーシアム（ドクコン）が開催されました。オーガナイザーの山野井順一先生、佐藤秀典先生、勝又壮太郎先生の御尽力に感謝申し上げます。ドクトラル・コンソーシアムとは、年次大会に先立ち開催された研究発表大会の大学院生セッションにおいて、優れた発表を行った大学院生の会員が、大会委員会の厳正な審査によって参加資格を得るもので、ドクコン参加者として選ばれた大学院生会員に対しては、「組織学会 2025 年度研究発表大会（大学院生セッション）優秀報告者」と称することを認めております。同日には、ドクトラル・コンソーシアム参加者による懇親会も開催され、相互の親睦を深めることもできました。

*2026 年度組織学会研究発表大会（関西学院大学）のお知らせ

2026 年度組織学会研究発表大会は、6月20日（土）・21日（日）に、関西学院大学（西宮上ヶ原キャンパス）にて開催されます。会員の皆様、スケジュール確保をお願いいたします。近々、大会報告の申し込みが開始いたします。大会報告を希望されている方は、執筆要綱を熟読の上、規定のフォーマットに則り原稿を作成して、チェックリストにて確認のうえ、ご応募くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

大会委員会担当理事 西野 和美

2026 年度組織学会年次大会 開催校挨拶

2026 年度組織学会年次大会は、2025 年 9 月 21 日（土）と 22 日（日）に、青山学院大学青山キャンパスにて開催されました。会場手配の都合により、9 月下旬の暑さも残る中、また、多くの大学において学期開始時期と重なるタイミングでの開催となりました。そして、学会の国際化の流れのなかで、海外からの参加者にとっては、初夏にピークとなる学会発表機会後のイベントでもありました。こうした中で、開催にご協力いただいた皆様のご負担への配慮もあり、コンパクトな大会を目指しましたが、お陰様で、334 名の皆様にご参加いただき、盛会のうちに 2 日間を終えることができました。

大会委員会の先生方には、投稿出版作業を進め、ご登壇もいただきました。英語セッションの審査と進行をいただいた国際委員会の先生方、そして、開催校主催のセッションにご登壇いただいた先生方・実務家の皆様に、また、準備段階から貴重な大会運営のご経験を共有いただいた近能先生や服部先生をはじめとする皆様には、慎んで御礼申し上げます。

本大会の構想として、国際化など、研究発表大会とは異なる方向性を打ち出すことを目指す青島前会長、関係各位にご相談させていただき、デジタル化の実務とアカデミックな研究の接点として、テクノロジーの進化と市場、組織のプロセスやマネジメントの変化、エコシステムなど、先端実務の現場を捉えることを試みました。具体的には、大会のテーマとして『VUCA の時代と組織の可能性—時間、空間とモード』とし、20世紀のアナログ時代の100年に蓄積された組織論・戦略論研究の英知を、どのような概念、理論、分析から現代実務に応用できるのかを、ディスカッションする場を目指しました。

通常プログラムは、開催校および大会委員会の企画で構成されました。大会委員会の企画として、第一日目は、「『よいこと』を『上手に成し遂げる』方法を考える学問としての経営学再考」に始まり、「組織科学」60周年企画セッション、「大学院生・若手研究者のアカデミックポストへ就職に向けて」、「若手研究者による研究テーマの再構築とフィールド開拓の実践」など、組織学会の歴史と伝統を感じながら、未来を志向するセッションが開催されました。

また、開催校企画として、“Creating Value in the Age of VUCA: Gaps between the Present and the Foreseeable Future in Time, Space, and Mode”と題し、国内外の研究者によるパネル・ディスカッションが行われ、実践共同体研究、繊維産地と今後のDX化での展開の可能性、DXと組織変革、ジョブ型人事の現状、Advancing Innovation Management Systemsなど、統一テーマに沿ったセッションが行わました。

そして、特別セッションⅠでは、大会のキーノート・スピーチとして、「The Future of Organizational Theory」というタイトルで、カリフォルニア大学バークレー校ビジネススクールのHeather Haveman教授に、デジタル化の中で、さまざまなレベルで世界の分断が進む現状において、ミクロレベルの組織論にどのような貢献が可能であるのかに關し、示唆に富むご提案をいただきました。特別セッションⅡでは、青山学院が立地する渋谷の開発を担う、東急株式会社から取締役専務執行役員の高橋敏之氏に、街づくりの歴史と戦略、渋谷の将来像について、詳しくお話をいただきました。2日目の特別セッションⅢでは、起業家パネル・ディスカッションとして、株式会社Sprocket代表取締役社長深田浩嗣氏とSATORI株式会社代表取締役植山浩介氏に、「スタートアップ経営者が志向するVUCA時代の組織マネジメント」として、討論形式でご登壇いただきました。

加えて、前回の本大会から始まった国際委員会主宰の英語セッションが行われました。Business Strategy、Entrepreneurship、Organizational Theory/Organizational Behavior、Innovation 分野にわたり、委員の方々によるピア・レビューにより選ばれた、多くの研究報告の発表が行われ、山田仁一朗先生、吉岡（小林）先生はじめ、ご担当の先生方のリードで、活発なディスカッションが展開されました。また、金曜日には、ドクトラル・コンソーシアムが開催され、若手研究者への貴重な学びの場となりました。

本大会は、青山学院ビジネススクールと経営学部教員有志により、コンパクトな大会を徹底しました。開催校側の運営では、1日目の夕方には、大規模な懇親会ではなく、参加自由の交流会が開催され、実に多くの方々にご参加いただきました。軽食やスイーツなどを手に取りながら、多様な歓談の場として、有意義かつ楽しい時間を共有いただきました。

重ねて、開催にご協力いただきました皆様、登壇者の皆様、参加者の皆様には心より御礼申し上げます。今後の組織学会の発展と皆様の益々のご活躍を祈りつつ、2026年度組織学会年次大会が盛会に終わりましたことを、慎んでご報告させえています。

2026年度組織学会年次大会 実行委員長 中野 勉
事務局長 山下 勝
実行委員会一同

2026年度ドクトラル・コンソーシアム報告

ドクトラル・コンソーシアムは、次世代の組織論研究を担う若手研究者の育成を目的として、2001年度より継続的に実施されてきた。本年度は年次大会に先立ち、9月19日（金）に開催された。会場については、開催校である青山学院大学よりご提供いただき、同大学の施設を使用して実施することができた。以下に、参加メンバーおよび当日のプログラム概要を示す（敬称略）。

	氏名	所属
オーガナイザー	山野井 順一 佐藤 秀典 勝又 壮太郎	早稲田大学 商学学術院 商学部 教授 筑波大学ビジネスサイエンス系 准教授 大阪大学大学院 経済学研究科 教授
参加者	伊藤 憲哉 岩本 慧悟 薗田 竜弥 藤岡 詩音 堀川 優弥	早稲田大学大学院 商学研究科 博士後期課程 東洋大学大学院 社会学研究科 博士後期課程 神戸大学大学院 経営学研究科 博士後期課程 一橋大学大学院 経営管理研究科 博士後期課程 東京大学大学院 教育学研究科 博士課程

今年度のドクトラル・コンソーシアムは、例年と同様に、午前・昼・午後の三部構成で実施した。午前の部では、参加者全員による簡単な自己紹介の後、二つのペーパー・ディベロップメント・ワークショップ（PDW）を行った。各 PDW では、大学院生が自身の研究内容を約 15 分で発表し、事前に指定された別の大学院生が約 5~7 分間、論文の強みおよび改善点についてコメントを行い、その内容を参加者全体で共有した。続いて、担当オーガナイザーが約 8 分間のコメントを行い、残りの時間を用いて全員参加型のディスカッションを実施した。昼の部では、三名のオーガナイザーが若手研究者に対して自らの経験を振り返ってのアドバイスをそれぞれ約 15 分で行った後、参加者との意見交換を行った。午後の部では、残る三つの PDW を実施し、最後に全体の振り返りと意見共有を行って閉会とした。

タイムテーブル

【セッション 1】

10:30~10:40 オーガナイザーと参加者による簡単な自己紹介（10 分）

10:40~11:40 ① 菊田竜弥さん（60 分）<コメント：佐藤先生、藤岡詩音さん>
休憩（5 分）

11:45~12:45 ② 堀川優弥さん（60 分）<コメント：山野井先生、岩本慧悟さん>
休憩（10 分）

【ランチョンミーティング】

12:55~13:10 山野井先生発表（15 分）

13:10~13:25 佐藤先生発表（15 分）

13:25~13:40 勝又先生発表（15 分）

13:40~13:50 意見交換・懇談・休憩（10 分）

【セッション 2】

13:50~14:50 ③ 伊藤憲哉さん（60 分）<コメント：勝又先生、菊田竜弥さん>
休憩（5 分）

14:55~15:55 ④ 藤岡詩音さん（60 分）<コメント：佐藤先生、堀川優弥さん>
休憩（10 分）

16:05~17:05 ⑤ 岩本慧悟さん（60 分）<コメント：山野井先生、伊藤憲哉さん>

17:05～17:10 クロージングリマークス（5分）

【懇親会】

17:40～19:40

各参加者の研究テーマは、複数製品における最適独自性（伊藤）、「面接に対する信念」尺度の開発（岩本）、リーダーシップ開発プロセス（菌田）、企業家エコシステムの形成過程（藤岡）、情緒的コミットメントとプロアクティブ行動（堀川）と多岐にわたり、定量的研究および定性的研究の双方を含む多様な研究アプローチが示された。参加者全員が 10 時 30 分の開始から 17 時 10 分の終了まで全セッションに参加し、終日を通じて活発かつ建設的な議論が行われた。

本 PDW の主たる目的は二点である。第一は、現在の原稿をいかにして学術誌（『組織科学』）に掲載可能な水準へと高めるか、という点にある。この目的のもと、大学院生は自身の研究を報告するだけでなく、他の大学院生の論文に対するコメントーターとしての役割も担った。他者の研究にコメントする経験を通じて、査読者の視点を体感し、より広い視野から自らの研究を捉える力を養うことが狙いである。テーマやトピック、方法論の異なる研究に向き合い、多角的な観点から内容を検討することで、研究を吟味するための視座を身につける貴重な機会となったと考えられる。

もう一つの目的は、大学院生に対してキャリア形成に関する示唆を提供することである。そのため、ランチョン・ミーティングでは、三名のオーガナイザーが自身の研究活動を振り返りつつ、研究の進め方や論文執筆における工夫、査読プロセスへの対応、さらには研究者としてのキャリアの築き方など、幅広いテーマについて話題提供を行った。大学院生が直面している多くの課題は、オーガナイザー自身も過去に経験してきたものであり、それらにいかに向き合い、乗り越えてきたのかを、具体的な体験に基づいて共有した。こうした経験の共有は、学会から受け継がれてきた指導や支援を次世代へと伝える機会としても、大きな意義を有するものであった。

コンソーシアム終了後には、参加者全員で大学近隣のイルフュームに移動し、懇親会を行った。コンソーシアムでの活発な雰囲気を引き継ぎ、論文や研究に関する議論を深めるとともに、研究者としての生活など、普段はなかなか語る機会のない話題についても率直な意見交換が行われた。

本年度のドクトラル・コンソーシアムも、昨年に引き続き、非常に有意義な機会となつた。開催にあたり多大なご尽力を賜った開催校の諸先生方、特に、山下勝先生と中野勉先生には厚く御礼を申し上げたい。会場準備のみならず、昼食の手配までしていただき、大変お世話になった。また、組織学会大会委員会の諸先生方ならびに執行部の先生方、前年

度総合オーガナイザーである宮尾先生、そしてその他すべての関係者の皆様に、心より御礼申し上げる。

ドクトラル・コンソーシアムへの参加は、大学院生にとって大きな名誉であると同時に、本会を通じて築かれる同世代の若手研究者や教員との所縁は、今後の研究人生においてかけがえのない財産となろう。大学院生は、所属大学において教員やOB・OG、先輩大学院生との「縦の所縁」を得る機会には比較的恵まれている一方で、他大学の大学院生との「横の所縁」や、他大学の教員との「斜めの所縁」を得る機会は極めて限られている。本ドクトラル・コンソーシアムにおいて、大学院生はこうした希少な「横」および「斜め」の所縁を得ることで、より彩り豊かな研究者人生を編むことが可能となろう。若手研究者の皆さんのが本コンソーシアムを通じて培った所縁が、今後も長く続いていくことを願うとともに、本会での議論を糧として、一人でも多くの大学院生の論文が『組織科学』に掲載されることを祈念する。

2026年度担当オーガナイザー 山野井 順一、佐藤 秀典、勝又 壮太郎

【2】2026年度組織学会研究発表大会のお知らせと公募要領

2026年度組織学会研究発表大会は、2025年度6月20日(土)、21日(日)に、関西学院大学を開催校として開催いたします。会場は関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスです。関西学院大学での開催は初めてとなります。

研究発表大会は、院生セッションならびに研究発表セッションを中心とした自由論題による発表となります。下記の通り報告公募のご案内をいたしますので、どうぞ奮って研究発表にご応募いただきますよう、お願い申し上げます。

参加者の皆様にご満足いただけるような研究発表大会となるよう、実行委員会一同、準備に万全を期して参ります。どうぞご理解とご協力の程、よろしくお願ひ申し上げます。

1. スケジュール

2026年1月23日(金)～3月27日(金)	演題登録・報告完成原稿受付期間
2026年1月23日(金)～6月上旬(未定)	事前参加申込受付期間
2026年4月中旬以降	大会報告審査結果通知
2026年5月上旬以降	大会プログラムの公開

2. 演題登録と報告完成原稿の提出

組織学会Webサイトからリンクをたどっていただき、2026年度組織学会研究発表大会専用ウェブサイト(Confit)にログインし(要会員番号。組織学会から郵送される封筒の宛名ラベル右下に会員番号の記載がありますので、ご参照ください)、演題、キーワードを登

録してください。キーワードは、セッション編成時の基準となりますので、以下のなかからご自身の研究にあてはまるものを選んでください。

【方法論】定量分析、定性分析、歴史研究、理論研究、文献レビュー（1つ選択）

【分野】ミクロ組織、マクロ組織、人的資源管理、経営戦略、国際経営、マーケティング、技術・生産管理、イノベーション、企業家、経済学、法学、行政学、社会学、心理学、工学(2つまで選択)

事前参加登録および演題登録をした上で、Confit の原稿提出画面より報告完成原稿を提出してください。締切日（3月27日）以降、登録情報（タイトル名、報告者名、複数で発表する場合は名前の順番、等）の変更は一切認められません。変更の場合、報告をご辞退いただくことになります。なお、報告応募をされる場合には、事前参加申込を行わない先に進めませんので、ご注意ください。

報告完成原稿は、『AAOS Transactions』掲載希望の有無に関わらず、執筆要綱に基づき、指定のテンプレートを用いて作成された原稿を受け付けます。提出前にはチェックリストを参照し、要件をすべて満たしているかをご確認ください。これまでの大会でも、テンプレート不使用、ページ数超過、行数字数やフォントサイズの変更、キーワード不在などがみられました。執筆要綱に則っていない原稿は、リジェクトされることがあります。

なお、『AAOS Transactions』に登載された論文は、公表論文として取り扱われます。他の学会報告や論文集の掲載等の二重投稿には十分ご留意ください。『AAOS Transactions』への掲載を希望する場合は大会報告後に改めて確認をいたしますので、ご回答ください。

3. セッションの種類とそれぞれの申込資格

演題登録時に、次のどちらかを選択していただくことになります。

(1)研究発表セッション：組織学会正会員（会費滞納者は不可）による自由論題の研究報告で、セッションは発表 25 分と質疑応答 15 分となります。

(2)大学院生セッション：組織学会正会員（会費滞納者は不可）の大学院生（報告時に正規の大学院生として在籍していること）による自由論題の単独での研究報告です。セッションは報告 15 分、質疑応答 10 分、総計 25 分です。報告者の中から、大会委員会で選ばれた方を秋の年次大会時に開催するドクトラル・コンソーシアムにご招待申し上げます。

4. 採否の決定

複数の査読者が完成原稿を査読し、採否を決定し、2026年4月中旬までに、筆頭報告者(ファースト・オーサー)に審査結果を電子メールにて通知します。

特に、参考文献リスト(References)の完全性は掲載の必須要件となっておりますので、投稿者の責任において細心の注意を払ってご作成ください。

2026年度組織学会研究発表大会 実行委員会

【3】ドクトラル・コンソーシアムについて

研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会が選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」(ドクコン)にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクトラル・コンソーシアムはその年の年次大会前日にはほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクトラル・コンソーシアムご参加の意思確認をいたします。ドクトラル・コンソーシアム参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクトラル・コンソーシアムは、いわゆる Paper Development Session です。ドクトラル・コンソーシアム参加者は、全員が『組織科学』仕様の(投稿規定に則った)論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクトラル・コンソーシアム提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクトラル・コンソーシアム終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。またドクコン参加者については、「組織学会○○年度研究発表大会(大学院生セッション)優秀報告者」という呼称を用いることになっております。

そして、ドクトラル・コンソーシアム開催日あるいは大会開催期間中のいづれかの夜は、ドクトラル・コンソーシアム参加者による懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通じて、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手がかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

ドクトラル・コンソーシアムに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは研究発表大会での大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクトラル・コンソーシアム「インビテーション・レター」への最初の一歩となります。

大会委員会

【4】2027年度組織学会年次大会のご案内と開催校挨拶

2027年度組織学会年次大会は、2026年10月24日（土）から25日（日）の2日間にわたり、一橋大学・一橋講堂（学術総合センター2階）にて開催する予定です。本大会の統一テーマは、「多極化する世界経済に挑む経営と組織／Management and Organizations Facing the Challenges of a Multipolar Global Economy」といたしました。

近年、ロシア・ウクライナ戦争、イスラエルによるガザ侵攻、いわゆるトランプ関税、さらには日中関係をはじめとする地政学的緊張など、国家間の摩擦は一段と深刻さを増しています。こうした状況の下で、国境を越えて事業を展開する企業を取り巻く経営環境は急速に複雑化しており、従来の延長線上にはない意思決定や組織対応が求められる局面が増えています。

本大会の統一テーマは、まさにこのような環境変化の中で、企業経営や組織はいかなる対応を取るべきなのかという問題意識に基づくものです。地政学リスク、経済安全保障、国際分業体制の再編といった大きな構造変化は、戦略だけでなく、組織設計、人材マネジメント、さらにはガバナンスのあり方にも根本的な再考を迫っています。

基調講演の一つとして、こうした国家間の複雑な政治・経済環境を乗り越えながらUSスチールの買収を実現し、大胆な戦略を実行された日本製鐵株式会社 会長 橋本英二氏にご登壇いただく予定です。グローバル経営の最前線に立つ実務家の視点から、現在の国際環境下における経営判断と組織運営について貴重なお話をうかがえるものと期待しております。

また学術サイドからの基調講演として、米中対立や関税措置が各国のイノベーション活動にどのような影響を与えてきたのかについて、厳密な実証研究を行ってこられたシンガポール国立大学の Kenneth G. Huang 教授にご登壇をお願いしております。

生成AIに代表される急速な技術進歩は、従来の経営組織や人的資源管理の前提そのものを揺さぶりつつあります。このように大きな変化に直面する時代だからこそ、社会の潮流を俯瞰し、大局的な視点を提供できる学術研究の価値は一層高まっていると考えます。同時に、学術研究が現実の経営や組織運営にいかに貢献しうるのか、その意義と可能性が改めて問われている時期でもあります。こうした認識のもと、歴史的に「実学」の拠点として発展してきた一橋大学で開催される本大会では、実務と学術研究の架橋という観点についても積極的に議論していきたいと考えております。

また、2025年度年次大会（法政大学開催）から開始された国際セッションについては、本大会においてもさらに発展させる形で実施する計画です。国際セッションの公募は

2026年2月開始を予定しておりますので、英語での研究発表を希望される会員の皆様には、ぜひ積極的にご応募いただければ幸いです。

開催場所は竹橋という都心に位置しており、国立キャンパスのような伝統的な学術空間とは趣を異にするかもしれません、その分、東京駅から至近という高い利便性を活かし、密度の高い議論を行える場としたいと考えております。

多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

2027年度組織学会年次大会

実行委員長 青島 矢一

実行委員 吉岡 徹 高田 直樹

【 2025 年度(第 21 期)決算報告 】

2025 年 12 月 1 日開催の組織学会会員総会（オンライン開催：Zoom ウェビナー）において、2025 年度（第 21 期）の決算報告が承認されました。

第21期 特定非営利活動に係る事業会計

活動計算書

自 令和 6年 9月 1日 ~ 至 令和 7年 8月 31日

特定非営利活動法人 組織学会
(単位：円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1 受取会費		
個人会員 受取会費	22,528,000	
団体会員 受取会費	800,000	23,328,000
2 事業収益		
定例研究会参加費	316,000	
年次大会参加費	2,642,000	
研究発表大会参加費	2,638,000	5,596,000
3 その他収益		
雑収入	100,000	
受取利息	8,571	108,571
経常収益 計		29,032,571
II 経常費用		
1 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	2,944,708	
法定福利費	536,147	
人件費計	3,480,855	
(2) その他経費		
大会委員会費	8,329,205	
組織科学編集委員会費	13,346,274	
学会賞委員会費	336,826	
企画・定例会委員会費	704,412	
支部研究費	22,006	
総務委員会費	4,251,469	
広報委員会費	136,840	
国際委員会費	462,680	
その他経費計	27,589,712	
事業費 計		31,070,567
2 管理費		
(1) 人件費		
給料手当	2,944,708	
法定福利費	536,147	
人件費計	3,480,855	
(2) その他経費		
振込手数料	34,705	
什器備品費	0	
ソフトウェア利用費	217,394	
支払家賃費	1,741,693	
会計顧問料	281,600	
法人登記手数料	0	
その他経費計	2,275,392	
管理費 計		5,756,247
経常費用 計		36,826,814
当期経常増減額		△ 7,794,243
III 経常外収益		
経常外収益 計		
IV 経常外費用		
経常外費用 計		
当期正味財産増減額		
前期繰越正味財産額		△ 7,794,152
次期繰越正味財産額		73,499,810
		65,705,658

【 2026 年度(第 22 期)予算】

2024 年 11 月 15 日開催の組織学会会員総会（オンライン開催：Zoom ウェビナー）において、2025 年度（第 21 期）の予算が承認されました。

— 第22期 予算書 —

自 2025年9月 1日
至 2026年8月31日

(単位：円)

科 目	予算額	備考
I 収 入 の 部		
1 会員会費収入		
個人会員分	23,500,000	
団体会員分	800,000	
2 定例研究会参加費	400,000	
3 研究発表大会・年次大会参加費	4,500,000	
4 雑収入	100,000	
当期収入合計(A)	29,300,000	
期首収支差額(前期繰り越し金)	33,845,973	
収入合計(B)	63,145,973	
II 支 出 の 部		
1 事業費	25,215,000	
大会委員会費	7,775,000	
組織科学編集委員会費	10,200,000	
学会賞委員会費(高宮賞)	450,000	
企画・定例委員会費	650,000	
支部研究費	240,000	
総務委員会費	4,200,000	
広報委員会	850,000	
国際委員会	850,000	
2 管理費	10,520,000	
給与手当	6,500,000	
臨時給与	30,000	
法定福利費	1,200,000	
振込手数料	40,000	
什器備品費	200,000	
ソフトウェア利用費	200,000	
支払家賃	1,850,000	
会計事務所顧問料	300,000	
社会保険労務士手数料	200,000	
3 予備費	50,000	
当期支出合計(C)	35,785,000	
当期収支差額(A)-(C)	△ 6,485,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	27,360,973	

【 総 務 関 係 】

【1】年会費納入のお願い

既にご案内のとおり、2026年9月より、2026年度（第22期）に入っております。つきましては、お早めに年会費のご納入をお願いいたします。

1. 口座振替（自動引落）の方

2025年9月29日にご指定の口座から振替いたしました。何らかの理由で振替できなかつた場合には、事務局よりご連絡を差し上げております。

2. クレジットカード決済開始について

年会費のクレジットカード決済の受付をしております。
「会員管理情報システム（SMOOSY）」のマイページよりお支払い手続きをお願いいたします。

その他、ゆうちょ銀行でのお支払いをご希望の方には、「払込取扱票」をお送りしておりませんので、各自窓口にてお手続きください。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い処理などで運営上の問題が発生しております。会員の皆様には、くれぐれもお忘れなく会費をお支払いくださいますよう、よろしくお願ひいたします。

【2】会員管理情報システム（SMOOSY）登録情報内容確認のお願い

当学会では、昨年度より、会員情報管理システム「SMOOSY」を導入しております。
会員マイページより、ご自身の登録情報（所属・住所など）の閲覧・変更、会費納付状況の照会、会費支払方法の変更が可能になっております。

これまで紙媒体で発行していた会費の請求書・領収書についても、SMOOSYの会員マイページからPDFファイルをダウンロードしていただけます。

まだSMOOSYにログインされていない場合、この機会にご確認いただけますと幸いです。

会員マイページへのログイン方法は以下の通りです。

【会員マイページ ログイン方法】

- (1) 会員マイページの[初めてログインする方はこちら]をクリックし、会員情報として登録しているメールアドレス（ログイン ID）を入力して[送信]ボタンをクリックします。

会員マイページ：

<https://aaos.smoosy.atlas.jp/mypage/login>

- (2) 「パスワード設定 URL のお知らせ」メールが届きましたら、メール文内のパスワード設定 URL をクリックします。
- (3) パスワードを入力して[登録]ボタンをクリックします。
- (4) [会員マイページ]ボタンをクリックすると会員マイページを表示します。
- (5) 画面一番下の[会員情報を変更する]ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

※操作方法が不明な場合は会員マイページ画面右上の[ヘルプ]をご参照ください。

※ログイン ID が分からぬ場合は、学会事務局までご連絡ください。

【2026 年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

A) 英文論文の校正支援(1 件当たり 5 万円)

(1) 支援内容

- ① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際カンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー(アブストラクトのみの場合子は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1 件当たり 5 万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 応募締切時において 40 歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。
- ② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低 2 年間は再応募できないものとします。

(3) 応募手続

- ① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット（組織学会ホームページに掲載）により申請してください。
- ② すでに投稿済みの場合には、受理レター（プリントアウト・コピー等でも可）を添付してください。
- ③ 締切は年3回（12月・3月・6月）設けます。2026年度は、2025年12月5日（金）、2026年3月6日（金）、6月5日（金）を期日とします。
締切後の1ヵ月後を目途にお知らせいたします。
- ④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の17時までとします。

(4) 支援決定後の手続等

- ① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から1年以内に投稿することが望されます。投稿後は、受理レター（プリントアウト・コピー等でも可）を組織学会に提出してください。
- ② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り（電子ファイルもしくはハードコピー3部）を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1件当たり 10万円)

(1) 支援内容

- ① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で40歳未満の正会員である共同研究を対象として、1件当たり10万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で40歳未満であることが必要です。
- ② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望されます。
- ③ 継続申請も可能ですが、原則として最長2年までとします。

(3) 応募手続

- ④ 参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット（組織学会ホームページに掲載）により申請してください。
- ⑤ 締切は年1回（3月）設けます。2026年度は、2026年3月13日（金）を期日とします。
- ⑥ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付し

てください。

(4) 支援決定後の手続等

- ⑦ 研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から 1 年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報告書は、組織学会ホームページで公開します。
- ⑧ 研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望まれます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り（電子ファイルもしくはハードコピー3 部）を組織学会事務局に提出してください。

組織学会通信 第98号

2025年12月20日

発 行 特定非営利活動法人 組織学会

事務局

〒100-0005 東京都千代田区丸の内 2-5-2

三菱ビル 地下1F 171 区外

TEL : 03-5220-2896

FAX : 03-5220-2968

URL : <https://www.aaos.or.jp>